

遺句集

風光  
る

平島  
ひかり

## 序

あまりにも突然の訃報に耳を疑った。数日前、あんなに元気なひかりさんにお会いしたばかりなのにと、悔やんでも悔やみきれない思いでいっぱいである。

私たちのためにいつも献身的に奉仕してくださったひかりさんに感謝の贈り物をするとしたら何だろうと皆で話しあい、遺句集を編むこととなった。

写真撮る夫に付き合ひ探梅す

吟行の家苞に買ふ能勢の栗

ご主人の理解と協力があるから自分は俳句ライフを楽しめるのだといつも感謝を絶やさなかつたひかりさんは、人のお世話もいとわずによくされた。それゆえに他人の労に対しても感謝の気持ちをおぼれなかったのである。

世話役の気配りに多謝年忘れ

六年ほど前に東吉野で一泊鍛錬会をした。そのときの懐かしい思い出は、いまもわたしたちみんなの宝物である。

朝涼の杉美林縫ふ散歩かな

いつも笑顔で幸せ一杯のひかりさんであつたけれども、それを克ちとるまでの人生においては人知れぬご苦勞もあつたと思う。

浮き沈むブイ眺めをる秋思かな

波間に浮沈するブイを眺めながら、多難であつた来し方の営みに思いを馳せた深い深い作品である。そうした試練を乗り越えてこられたからこそ人の痛みにも気配りができ、優しくなれるのだと思う。ひかりさんが育んでくださった絆とその熱い思いとは、これからも一人一人の心のなかに生き続けるでしょう。

この遺句集に込めた私たちの感謝と哀悼が、天上のひかりさんに届くとともに、ご遺族の慰めの一助となることを切に祈つてやまない。ひかりさん、ありがとう。ほんとうにありがとう。

いまごろは天国の野に遊ぶべし　みのる

平成二十九年三月二十三日

やまだみのる





# 每日句会

枯葦の水面を見つめ鷺静止

長蛇なす貨物列車や風光る

早春の日矢が貫く並木道

と見る間に海の色失せしぐれけり

強風に威をえて猛るどんだかな

鴨の陣水脈うち重ねつつ進む

御降のふるほどもなく日矢洩るる

鉾立てる木々を鎧に山眠る

世話役の気配りに多謝年忘れ

水面切る鯉の背びれや池小春

散り尽くし冬天支ふ大銀杏

風が大好きとコスモス揺れやまず

目交ひに主峰の見ゆる花野かな

深山道途切れ途切れに残る虫

蜻蛉の翔ちては戻る潦

長雨に耐へかねて臥す稲田かな

吟行の家苞に買ふ能勢の栗

大噴水ミストとなりて消えにけり

古刹とて礎石あるのみ昼の虫

新涼の樹下に目瞑る石仏

コンビニを出るに覚悟の猛暑かな

離陸機の尾灯瞬く涼しさよ

万緑を貫く千本鳥居かな

目指す駅見えるて遠し炎天下

団作りに精だす蜘蛛をみて飽かず

朝顔の鉢抱き下校一年生

ジェット機の機首を立てたる夏の空

木隠れに彼と彼女や螢狩り

米どころ近江は今し麦の秋

欄に寄れば鯉くる橋涼し

余花にあふ山湖の径を分け入れば  
新樹光街を貫く大通り

行き違ふ水上バスの水脈涼し

迷ひ込む子雀に句座てんやわんや

池普請終へたる水に鯉躍如



休み田に竿立ち並べ鯉のぼり

街路いま雨に浮き立つ花水木

捨て畑に集ひて遊ぶ巢立鳥

芽吹きそむ木々芳しと鳥語降る

春日影をどる手水の水底に

下萌の丘のベンチに推敲す

梅の丘どの径とるも迷路めく

広芝にあまねくとどく春日かな

玉の日に透きて蠟梅よく匂ふ

大玻璃に雪舞ひやまず宿籠

探梅や峽の日差に背を押され  
子供らに貫ひて嬉しお年玉  
裸木を抱擁せんと朝日燦  
踏みしだく木の実の音や柚の径  
天蓋の紅葉愛でつつ磴のぼる

苔庭の珠は時雨の忘れ物

冬空を歪めて手打ガラス窓

琥珀色までひといきと大根煮る

日陰より日向がよろし石露の花

短冊のホ句諾ひつ萩愛でる

二上山の裾に高鳴る落し水  
石庭の鶴亀石に風さやか  
禅寺の白壁に沿ふ曼珠沙華  
出来秋の宮に伝はる力石  
村祭り土俵の脇に力石

烈日をものともせず蓮涼し  
草踏めば吾が靴先にバツタ飛ぶ  
犇めける蓮に風無き亭午かな  
写仏する幽き筆の音涼し  
初蟬と聞けど空耳かもしれず

熊笹の揺れどほしなる径涼し

大木に宿りて高し凌霄花

乳母車双子の寝顔樹下涼し

青松の片陰ひろふ白砂浜

五月雨や肩を寄せ合ふ伊根舟屋

青松の林間に透く卯浪かな

賀茂川の飛び石をゆく日傘かな

新緑の庭に眼福なる茶室

鯉の鰭水面切りゆく池涼し

落花屑ガードレールに張りつきぬ



激つ瀬にさしかかりたる花筏

峡晴れて真澄の空や花辛夷

長堤を綴りて風の雪柳

参道の洩れ日に燃ゆる牡丹の芽

写真撮る夫に付き合ひ探梅す

啓蟄や古都の大路に人溢れ

春節祭そこここに華語氾濫す

枝絡む日に輝ける冬芽かな

抽んでて宝珠は春日集めをり

藁苞に差し込む日あり寒牡丹

新成人見上ぐる母の慈眼かな  
たつ湯気に檜匂へる初湯殿  
寒禽の鋭声真田の古戦場  
蔵元の振舞ひ酒や菊日和  
爽やかな水辺の風に人心地

丘陵に雪崩るる風の真葛原

閻魔堂出でてより憑く秋思かな

もたれ合ひ百余の羅漢秋を聞く

と見る間に増ゆる水輪や時雨来る

海跨ぐ高速高架秋高し

川面へと傾ぐなぞへの松涼し  
黒き矢となり水中の鶉の速し  
目に涼し羊齒群落を渡る風  
岩走る水を引きたる作り滝  
園丁と世間話や庭涼し

盤石を要に苔の庭涼し

山ホテル軒は燕の巢の銀座

東雲の山深きよりホトトギス

な踏みそ螢火一つ足下に

愛鳥日常と変らず雀に餌

磊磊の瀬音涼しき茶屋床几

花菜畑過ぎりジェット機着陸す

池畔亭水かげろふの春障子

推敲の四阿芽木の風通ふ

観光船すれ違ふ沖風光る

身に入むや波止に震災モニユメント

移民像真向く外海風光る

飛火野に鹿寄せホルン響きけり

澄む水に恋を占ふみくじかな

丁目石ここよここよと残る虫



腰おろす草のなぞへは虫浄土

コスモスの風写さんとカメラマン

木漏れ日にひらめき落つる色葉かな

広芝の四方八方秋あかね

人気なき朝の浜辺に花火屑

豆ほどの蛙尻尾の残りをり

と見る間に山影失せし大夕立

湯ほてりに風心地よし夕端居

白南風に軋みやまらずよ船溜まり

雲の峰より抽んでし摩天楼

薄墨に烟る湖北や花の雨  
春昼や振子時計の刻む音  
手を浸す御手洗川へ春日燦  
福引の外れもうれし地の野菜  
参道に鹿の御慶を受けにけり

小商ひ終へて笑顔の晦日蕎麦

黄落の窓辺にランチタイムかな

夕づきし築地にのこる石踏あかり

晩秋の木々の五彩や古都巡る

神木の大き根方や石踏の花

所在無く丘のコスモス風を待つ

斑鳩の九輪の空を鳥渡る

なほ続く貨物列車や秋日濃し

秋声は台船傾ぐ波間より

うたた寝の手足の冷えや秋深む

背高の萩に埋もる庵かな

参磴の手摺り灼けゐて役立たず

お不動へ浄めの水や涼新た

夕暮の空より鳶の笛涼し

堰落つる水のきらめき梅雨明くる

蓮の葉をたたたら走りす雨の珠

沙羅落花して苔庭の穢となさず

老鶯の目覚め促す山の宿

指呼の先動かぬ影や青葉木兔

大滝の威に佇つ人らみな寡黙

推敲の句帳に止まる川とんぼ

青嵐特急電車通過駅

泉水に彩を散らして錦鯉

夏霧の晴れて天守に瀬戸四国

百の傘牡丹にかざす法の庭



人  
気  
な  
き  
ベ  
ン  
チ  
と  
な  
り  
ぬ  
花  
は  
葉  
に  
踏  
む  
に  
惜  
し  
落  
花  
畳  
の  
遊  
歩  
道  
花  
屑  
の  
友  
禅  
模  
様  
遊  
歩  
道  
春  
泥  
の  
足  
で  
催  
促  
鹿  
せ  
ん  
べ  
い  
水  
盤  
に  
揺  
る  
る  
は  
窓  
の  
春  
日  
差

春風にのりて鹿寄せホルンかな

老幹の白梅匂ふ屋敷町

国道の穢は雪塊の落とし物

砲台に遍く日差し春隣

砦めくマンション群や冬の浜

高樓に冬晴れの海展けけり  
寒風が頬撫づ岬の露天の湯  
ほ句添へてとどく恩師の年賀状  
着膨れて車中化粧すおみなかな  
彫像に黄落やまぬ御堂筋

クリスマスオブジェを巡る園愉し

夕映ゆる桜紅葉の大樹かな

喬木のポプラ散華のごと落葉

陵の見えるて遠し里時雨

一刷の雲に行く秋惜しみけり

日だまりに稚魚の群れゐて川澄める  
と行き斯く戻り埠頭の秋惜しむ  
浮き沈むブイ眺めをる秋思かな  
一陣の風に大袈裟萩揺るる  
ワンピース品良く召され生身魂

秋茄子をきゆきゆと鳴かせて塩もみす

僧堂に相和す経の声涼し

聳え立つ大三門や晩夏光

全開す茶室に庭の苔涼し

堂縁に女人高野の塔涼し

朝涼の杉美林縫ふ散歩かな

三石は阿弥陀三尊蓮浮葉





吟  
行  
句  
会

水脈重ね不即不離なる番鴨

色変へぬ松のせり出す鏡池

ダリア園こんな種類多しとは

大花野立ち去りがたし蝶もまた

雨に伏し小径を塞ぐ秋の草

潦うづめつくして萩の屑

秋の人佇む雨の池塘かな

水に透き万華鏡めく鯉涼し

遠州の庭の要の滝涼し

水に透く水搔き忙し鴨進む

右 左 水 音 高 鳴 る 紅 葉 坂

観 音 の 裳 裾 と な り て 黄 落 す

ぺ ち や く ち や と シ ニ ア 軍 団 紅 葉 狩

友 を 待 つ 間 の 長 か り し 秋 暑 か な

盛 り な る 萩 に 短 冊 揺 れ や ま ず

纏れつつ不即不離なる萩の蝶  
一服の涼橋殿に風通ふ  
金色の九輪の尖る青嶺かな  
十葉や大樹の影を埋め尽くし  
遙拝す山藤匂ふ回廊に

稜線の膨らむ如く山笑ふ

傾ぎたつ春日燈籠苔の花

観覧車いま天辺や山笑ふ

大池を統べて噴水高きかな

天辺の棚田の跡は芒原

天平の衣裳のガイド古都の秋  
目交ひを過る深山の恋螢  
通ひ来る谷戸の棚田の風涼し  
畦道の茅花に谷戸の風渡る  
各停の電車に揺られ春眠し

古町を抜けて金魚田広ごれり  
瀬の樂の右に左に滝の道  
川波にたゆたふ花の屑畳  
水上橋駆ける吾子らに風光る  
手焙りに菊炭火照る旧家かな



息とめしごとと大噴水止まりけり

鯉躍如映る紅葉を揺るがせて

甘櫳の丘に秋風通ひくる

春雨の水輪をつづる心字池

開け放つ方丈滝の音ひびく

洩れ日さす礎に五彩の散り紅葉

水面より秋天仰ぐ亀の首

打ち水に苔匂ひ立つ寺苑かな

たうたうと宇治の流れや夏兆す

着ぶくれて子らの登校見守りぬ

つくばいに鏡映りす薄紅葉

夕さりて平城宮址虫浄土



# 定例句会

彩窓に透きて揺らげる枯木影

風神のひと吹きに揺るとんどの火

竜と化し秋天へ消ゆ護摩煙

身にしむや命透けたるクリオネに

展望閣足下より湧く蟬の声

大いなるパンくず担ぐ山の蟻

水煙の青嶺へ尖る神呪寺

小流れの淀みに屯あめんぼう

田に透けて平和と見たる蝌蚪の国

木道に立ちては屈み菖蒲撮る

一と皿で満腹となる大根焚

朱柱のさはにまぶしく宮小春

宮小春誰も彼も撫づ力石

釣果などどうでもよろし池小春

彩窓を貫く秋日濃かりけり



対岸に佇つは句仇秋澄める

道をしへユーターンとは何ごとぞ

涼風の通ふ四阿去りがたし

蝉時雨ぱたりと止みし亭午かな

白布うち広げしごとく滝落つる

滝しぶくま近に匂帳開きけり

耳朶涼し水琴窟の筒に添ふ

朱の欄に佇ちて一望梅の丘

お地蔵に洩らす願ひの息白し

亀池に亀の見えざる寒さかな

片言の英語通じて汗を拭く

四阿の涼し棋士らは白熱す

築山の要の松の色変へず

春落葉蹴散らして鳩翔ちにけり

擬宝珠に落しものなる冬帽子

法の庭一鉢ポインセチア置く

林立のマスト眩しき晩夏光

推敲の句帳に落花また落花

学舎へと坂がかかる道花盛り

傘さして歩くに狭き梅の径

庭園の一水に沿ふ石露明り

池渡る風に蒲の穂さんざめく

バラの雨伏し目がちなるアンネ像

園に満つ呵々大笑のチューリップ

家苞は新酒にあらず酒の粕

秋晴の巨船ハングル文字見ゆる

爽やかに三つ子遊ばす母若し

禊場に高鳴る春の水音かな

春めくや路上ライブの人の輪に

玉の日の浦にたゆたふ百合鷗

梅雨明けを告ぐるごとくに飛行雲

春風や埠頭に白き異国船

日溜りの蠟梅の香に佇めり

弔句

花待たず永久の別れとなりにけり	満	天
春愁や友の急逝諾へず	せい	じ
棺の汝れ寒紅さして笑むごとし	ぽん	こ
春疾風突と逝かれし汝れ悼む	はく	子
汝れ悼み涙こぼるる春ひと日	明日	香
春風がまたねの声をさらひけり	こす	もす
目瞑れば浮かぶ倂春光裡	わか	ば
遺句集に覚えある句やあたたかし	う	つぎ
思ひ出は君と歩きし能勢の春	小	袖
春星のひとつとなりて逝きたまふ	よし	女
蝶となり天の美空へ翔たれけり	三	刀



温かな奉仕の心うけつがむ  
亡き友を偲べと法の春の雨  
青き踏む汝れの遺徳を偲びつつ  
初音いま吾を呼びしかとふり向きぬ  
彩窓の春の日差しの失せしごと  
春夕焼燃ゆる彼方に汝れ悼む  
春来しと告ぐ声天にとどかずや  
春光にほほえみ残し逝きたまふ  
唄ひつつ天をめざしぬ揚雲雀  
春光の突と失せたる天仰ぐ

さつき  
なおこ  
宏 虎  
よう子  
かかし  
有 香  
よし子  
菜 々  
たか子  
みのる

## 追悼

吟行地の下見や会場の予約などいつも率先してお世話してくださったひかりさん。私達はすっかりあなたに頼りきっていました。ゴスペル俳句会にはなくてはならない存在でした。「お父さんと一緒になってとても幸せだった」「子供達もい子に育った」去年の暮一緒に吟行した時にふとひかりさんが洩らされた言葉です。ご家族との生活がとても充実されていたのだと思います。俳句が縁でひかりさんと知り合って十三年、その間いつも仲良くしていただき親友としてお互い切磋琢磨してきました。ひかりさんのことは生涯忘れません。いい友とめぐりあったことに深く感謝しています。ひかりさんありがとう。(ぽんこ)

ひかりさん、教えてもらった折り紙ちゃんも折れたのにみてもらえなくてとても残念です。ずっと大事に大事にとっておきますね。天国で俳句三昧の日々送ってね。(こすもす)

ひかりさん、どうしてそんなに早く……この気持ちがいつまでも消えませんが、いつも笑顔で率先して句会のご奉仕をしてくださったひかりさん。ちよつとの事でも相談に乗ってください、いろいろとお世話になりました。本当に有難うございましたと感謝の気持ちでいっぱいです。どうぞ天国で安らかにお過ごし下さい、そして地上の私達を見守って下さいませ。(満天)

ひかりさんとは、二月二八日の合評会でお会いし、「また次の句会でね」というてお別れしたばかり、思いがけない訃報が届いたのは、ちようどその一週間後のことでした。二月の定例句会の帰路、難波で買い物をするからと言われて、地下鉄御堂筋線に同乗し、淀屋橋でお別れしたことも鮮明に思い出されます。あんなに元気にお別れしたのに何故!、という気持ちをぬぐうことができません。本当に残念です。人懐っこい笑顔が印象的だったひかりさん、七年ほどのお付き合いでしたが、ともにゴスペル俳句での交わりを楽しみむことができましたこと本当にありがとうございました。謹んで哀悼の意を表します。(せいじ)

ひかりさん、いつぱいいつぱいお世話になりました。ほんとうにありがとうございます！  
どうぞ安らかにお眠りください。(はく子)

ひかりさんの鈴のようなお声がいまも頭のなかで鳴っているようです。ひかりさん、ほんとうにありがとうございます。(よう子)

いつもひかりさんの明るい笑顔に癒やされておりました。会場の予約から吟行地の下見まで徹底したお世話にただただ感服しておりました。心から感謝しています。ひかりさんとは、吟旅で同室になって以来親しくさせていたただくようになり、大阪組の一員に加えていただいてよきお交わりをさせて頂くようになりました。一緒にお弁当を頂きながら、ご主人様とドライブに出かけられたことなどを嬉しそうに話される様子から、ひかりさんのお幸せな日常が目に見えかぶようでした。ひかりさん、俳句のお交わりを通してたくさんの楽しい思い出をほんとうにありがとうございます。心からご冥福をお祈りいたします。(わかば)

「明日香さくくん、お元気ですか、改札で待ってるから来てね」とおっとりした声で句会のたびに誘ってくださったひかりさん。「○○さんを待っててあげて。△△さん大丈夫かな、会場わかるかな。」といつもみんなを気遣ってくださったひかりさん。あなたのおかげで私は今日まで俳句を続けてこられました。ほんとうにありがとうございます。いくら感謝しても感謝しきれません。(明日香)

今日はひかりさんの句を三句も頂いたよ」「えっ！ほんとに」とついこの間会話を交わした夙川吟行が最後の句会になろうとは。寂しくて残念でなりません。能勢が大好きやねんと言って私達のローカル句会を気遣い遠路を駆けつけて下さったひかりさん、優しい細やかな心配りに何時も助けられました。ひかりさん、本当にありがとうございます。能勢に蛍が飛んだらひかりさんが来てくれていたと思うことにします。(うつき)

能勢のさくくらはほころびはじめているのに、今年と一緒に見れないのがとても残念です。こころよりご冥福をお祈りいたします。(よし子)

ひかりさん、いつも笑顔をありがとうございました。吟行でみなさんを見失いそうになったとき、あなたのお声や、笑顔を見つけて何度ほっとしたことでしょう。みんなを包み込むような温かいあなたの笑顔、忘れません。心よりご冥福をお祈りいたします。(菜々)

ひかりさん、ゴスペル俳句会に入つて一番関わり深く、いろいろ教えていただきましたね。気さくで面倒見の良いひかりさんにずいぶん助けられました。天国からあの明るい声で叱咤してくださいね。(たか子)



## あとがき

ひかりさんとの突然のお別れは、ご遺族はもちろん、私たちにとっても耐え難い哀しみでした。けれども、たとい地上における肉体は朽ちても、天に引き上げられた魂は神の御もとで永遠の命に生きる、と聖書は約束しています。

死は、誰もが避けることの出来ない摂理ですが、その時にはまた天上でひかりさんと再会することができるとです。希望をもってひかりさんの遺して下さった優しさを受け継いでいきましょう。

ゴスペル俳句会に集うメンバーの心がひとつとなつて我らが愛する平島ひかりさんの遺句集を御霊前に捧げることができました。この小冊子を、ひかりさんのおもかげとして在りし日を偲びましょう。

句集作成にあたり、ご協力くださったお一人お一人に心からお礼申しあげます。特に製本装丁については、福岡の大田さつきさんにご尽力いただいたことを感謝して記しておきます。(やまだみのる)





2011年6月 東吉野一泊鍛錬会

平島ひかり遺句集 『風光る』

平成二九年三月二四日 印刷

平成二九年三月二四日 発行

編集 Gosper俳句  
印刷製本 大田さつき